

響き

隙間なく、水を湛えた如く続く家並みは平たく広がる
その広大な家並みは俺の踏みしめる大地となる
大地の下、人間の細やかな感情のひとつひとつも折り重なり
次第にひとつの鳴動となって、大地のひとつの響きと為す
もはや俺の足下に広がる平らな大地のみが残る
もはやひとつの広大な大地のみが残る

大地の上を風は吹き渡る、壮大な^{むなむな}虚々しさが吹き渡る
俺は平たい大地の上に立って空に手を伸ばし
しかも足の下には壮大な歴史が鳴動し
もはやそのひとつの響きの中に人間の響きは聞き分けられずとも
その大きな鳴動に力を得て俺は空に手を伸ばす
その空の何と遠くにあろうとも
俺は手を伸ばす、切れよとばかりに精一杯に

大地よ、さらに堅固であれ、俺も踏みしめる
大地よ、ごうごうと鳴動し
さらに鳴動し、俺を力づけよ・・・

(1982.4.6)